

鍼灸における科学とアート

奥野 友香

板橋中央総合病院 血液浄化療法センター

はじめに

鍼灸は、補完・代替医療（CAM）として東洋だけでなく世界に広く普及している。近年の欧州諸国の鍼灸の利用率の急増に伴い、その有効性や安全性、経済性を評価するために調査研究が始められた。今回は、非科学的医療とされている鍼灸の科学的側面とアートの側面を紹介したい。

鍼灸の調査研究

欧州諸国の鍼治療の利用状況（1994）は、CAM 利用ランキングの上位に位置している。各国の利用率は、フランス 21%、ベルギー19%、英国およびオランダ各 16%、デンマークおよびスウェーデン各 12%、米国 3%で年々増加している。一方、わが国の利用率（2001）は、7%と意外に低い。欧州諸国の調査研究では、メカニズムの解明と共に「臨床に有用か」という科学的根拠に基づいた医療（EBM）の概念でも進められている。わが国の鍼灸はたいへん歴史が古く、現在では、厚生労働大臣が認可した国家資格「はり師」および「きゅう師」を有する者が行っており、鍼灸の情報を医療関係者や国民に提供するための研究成果を集積する必要がある。ところが、わが国の伝統医学にもかかわらず、研究分野においては欧州諸国に追従している状況である。

鎮痛効果と自律機能の調節作用

鍼灸の科学的側面について、鍼灸による鎮痛作用と自律機能の調節作用に関する研究の歴史を振り返りながら、その特徴や問題点および今後の方向性について紹介する。1970年代に針麻酔が世界に広まり、鍼鎮痛のメカニズムに関する基礎研究が多く行われている。鍼の刺激によって脳脊髄液中に内因性オピオイド物質が出現することが明確になり、下行性鎮痛抑制系を賦活して疼痛を抑制することを示唆されている。また、わが国の研究者によって体性・自律神経反射のメカニズムが明らかとなり、鍼灸と自律神経の関係も分かってきた。

一方、ヒトと動物および実験条件などの相違から、既に紹介した基礎研究の結果を直接ヒトに適用することが難しいことも事実である。とくに、鍼灸の治療方法の中には、鍼や灸による物理的刺激だけでなく、アートの側面である医療面接や身体診察といった言語的、非言語的コミュニケーションも包括されている。例えば、意識のあるヒトに対して鍼や灸の刺激を加えると、その刺激が体性感覚として脳で知覚および認知されて、情動反応が誘発されるとともに、意識とは別の様々な反射性反応が誘発される。つまり、鍼や灸の刺激とともに情動による身体反応の影響が生じるのである。

まとめ

鍼灸の科学的側面を明らかにする目的で、鍼や灸の物理的刺激だけに限局した生理的な反応のメカニズムを解析することは、非常に難しい。しかし、それは、アートの側面である患者と施術者との間に構築される信頼関係や相互コミュニケーションが不可欠であることも意味している。

